

文化交渉の視点から見る 山崎豊子『大地の子』

李 瑞 華

はじめに

山崎豊子は日本社会派小説の代表作家である。1970年代から戦争題材の小説創作に没頭した山崎は、約20年にわたって、「戦争三部作」を創作した。『大地の子』はその内の一つであり、1945年から1985年までの中国を舞台とした中国残留孤児を主人公にした物語である。「今後の中国研究、中国理解の裾野を拡げた」¹⁾と言われたこの小説は、1990年に文藝春秋読者賞を受賞し、1991年に菊池寛賞を受賞した。さらに、この小説は1995年にNHKと中国中央電視台の合作でドラマ化され、モンテカルロ国際テレビ祭最優秀作品賞を受賞した。その一方、「盗用疑惑」²⁾をめぐって訴訟にまで発展し、原作の翻訳は中国でいまだ出版に至らず、ドラマも放映されていないのである。

山崎は『大地の子』を執筆する際に中国での取材にあたり、当時中国共産党の総書記であった胡耀邦と3度も会見し、胡の全面的な協力を得て、普通、外国人は立ち入り禁止とされている場所でも取材に行けたのであり、8年がかりで「命を懸けて」³⁾書き上げたのである。胡の協力がなければ、この作品は完成しえなかった。ならば、なぜ胡は山崎に全面的に協力したのか。この小説は日中関係にどのような影響を及ぼしたのか。本稿は、山崎がこの小説を執筆する1980年代前後の時代背景を踏まえ、文化交渉の視点から上述した問題を明らかにしてみたい。

1 時代背景としての1980年代

1980年前後、世界に「強い指導者」が次々に誕生していた。1980年11月の米大統領選でロナルド・レーガンが当選、時代の主役に躍り出た。翌1981年1月に大統領に就任したレーガンは、「国防費の大幅増、大減税、規制緩和」など、「保守革命」を推進した。レーガンはソ連を「悪の帝国」と呼んだ。「スターウォーズ計画」とも称された戦略防衛構想（SDI）は、軍事技術を競り合うソ連に対する圧力となる。そして、レーガンの同志であり続けたのが、1979年に英国の首相となったマーガレット・サッチャーである。サッチャーも「国家再建」に挑んだ。さらに、1980年、ソ連側にも注目すべき変化があった。ミハイル・ゴルバチョフは党書記長として「ペレストロイカ（立て直し）」政策を推進した。その政策に対し、ソ連の歴史に幕を引くと予測したものはいなかっただろう。日本で1982年に首相に就任した中曽根康弘もまた、レーガンの盟友となった。中曽根は、大平政権以来の日米同盟強化路線を発展させ、日米が「運命共同体」であると宣言し、レーガンとの間に、「ロン」、「ヤス」と呼び合う個人的な信頼関係を築いていく。「国際国家」を標榜する中曽根には、アジアにも盟友がいた。1980年に中国共産党政治局常務委員に昇格、1982年に総書記となる胡耀邦である。中国は鄧小平の号令により、1978年末から改革開放に大きくかじを切った。日米をはじめとする西側に接近、1979年には、米国の仇敵でソ連陣営にあったベトナムとも戦火を交えている。中曽根と胡が作った良好な日中関係は、1985年8月の中曽根の靖国神社公式参拝などで軋むことになるが、今もって「過去最高」と言われる⁴⁾。

1983年11月、胡耀邦が訪日した。胡は、中曽根が首相になる2ヶ月前に、新設の共産党総書記ポストに就いていた。改革派の実力者で、鄧小平の権力掌握に決定的役割を果たした人物である。昭和天皇と会見して天皇訪中を要請し、首脳会談で中曽根と胡は、事務当局の事前打ち合わせ通り

に「平和友好、平等互惠、長期安定」を日中関係の基本原則にすることで一致した。その時、中曽根が突然、「もう一つ、『相互信頼』を付け加えよう」と提案した。胡は、即座に同意した。両国有識者による「日中友好21世紀委員会」の設立にも賛同した。胡はさらに、歓迎昼食会の席上で、「3000人の日本人青年を来年、中国に招きたい」と述べた。このプランを披露して、当時の国際社会にも日本の官民にも大きな衝撃をもたらした。そして、「日中友好21世紀委員会」は1984年に発足し、いわば「第二トラック」として日中間の問題の調整を行ってきた⁵⁾。

経済発展路線をひた走る中国は、日本の協力を切望していた。日中がソ連に対する警戒感を共有できる時代でもあった。加えて「二人の波長」が合った。両国間の「相互信頼」は、まず、中曽根と胡の間に生まれた。二人はその後、「2000年の歴史で最良の日中関係」と評される「日中友好」全盛期を築くことになる。翌1984年3月、中曽根が訪中した。胡は日本の経済、技術協力に対して、「中国はあなた方の厚い友情を決して忘れることはない」と、率直に謝意を表した。中曽根は、「協力は戦争により大きな迷惑をかけた反省の表れであり、当然だ」と応じた。1984年10月1日の中国の建国記念日（国慶節）、北京の天安門で軍事パレードを参観した約3000人の日本青年は、夜、中国の青年とのダンスパーティーに参加した。中国側青年団体の代表は、のちに共産党総書記となる胡錦濤である。1985年6月に日本の総理府が行った外交世論調査では、「中国に親しみを感じる」は、「どちらかというとき親しみを感じる」を合わせて「75.5%に上がって」いた⁶⁾。

つまり、1980年代は、「歴史認識問題が顕在化した時代」であった⁷⁾。中曽根・胡耀邦両者の認識は「ソ連の脅威に対抗するには日中提携が欠かせない」という点で一致していた。中曽根・胡の友好は、いわば中ソ対立を背景とした「日中友好」であった。先に中曽根内閣は「第二次円借款供与」を決定したが、ここには従来同様、中国の改革開放を支援し、その西側への編入と穏健化を図る狙いととも、戦争責任の清算という意味合いもあ

った。前述の通り、中曽根は1984年3月の訪中時に、日本の対中経済協力について謝意を表明した胡耀邦に向かって、「かえって恐縮しており、対中協力は戦争により大きな迷惑をかけた反省の表れであり、当然のことである」と述べていたのである。このように長期的な日中提携に向けて、「過去の負の遺産を片付ける」必要性を中曽根は認識していた⁸⁾。中曽根内閣を中心とした1980年代においては、短期的さらには中長期的な考慮から、日本政府が「将来脅威となるであろう中国との間に紛争の種を残しておく」ことは好ましくないと考えて、歴史認識問題に「自制的に対処」していた。「中曽根康弘の時代」の政治家・外交官には、そのような自覚があり、そのための対策も「政治的に可能」であり、「外交上の結果」もある程度は見込まれていた⁹⁾。

2 山崎豊子と胡耀邦の二人の絆

「過去最高」と言われている良好な日中関係のうちに、胡耀邦が1984年11月29日に『大地の子』を執筆する山崎豊子に会い、不可能とみられていた中国残留日本人孤児関係の現場取材を認めたのも、この頃のことだ。「私は中国の作家とも、普通は一度しか会わない。外国の作家に三度会ったのは、あなたが初めてです」¹⁰⁾とは胡耀邦の言葉である。確かに、山崎は執筆の際に中国での取材にあたり胡の全面的な協力を得たほか、3度も中南海の公邸に招かれた。胡は最初に山崎と会見する時、「中国を美しく書いてくれなくてもよい。中国の欠点も、暗い影も書いて結構。ただ、それが真実であるならば」¹¹⁾と告げた。つまり、中国の取材の扉を、胡耀邦総書記の英断で開かなければ、『大地の子』という作品は完成しえなかったのではないか。

2.1 「文学の愛好者」であった胡耀邦

胡耀邦は学生時代からずっと文学の愛好者であった。彼は唐詩や宋詩、

古典文学に親しみ、また古今東西の小説、戯曲にも造詣が深く、「多くの内外の作家たち——日本の山崎豊子、アメリカ国籍の中国人作家韓素英、カナダ国籍の中国人作家陳若曦、国内の老年、中年、青年作家たちとの交友関係」を持っていた。胡が作家たちの創作の自由の要求に対して、「中国の一般の高級幹部たちよりも深い理解」を示し、彼らのその要求を支持し、擁護、評価した点は、「中国文芸界では衆人の認める」ところである¹²⁾。

日本の江戸時代の国学の大成者である本居宣長（1730-1801）の思想の核の一つとされる「ものごのあわれ」論は、「儒教や仏教のような道徳的・宗教的な規範を前提に文学を論じることを戒め、文学の本質が、人間の感情表現にあること」¹³⁾を説いたものである。19世紀のフランスの文学史家のイポリト・テーヌ（Hippolyte Adolphe Taine, 1828-1893）氏は、『英国文学史』の緒論で「literature, it is the study of man」¹⁴⁾と初めて明確に述べ、「文学本来の役目は、感情を記録することにある」¹⁵⁾と指摘している。日本近代文学研究者の佐藤泰正氏は、「我々は国籍とか、人種とか宗教の違いを越えて、人間である。人間であるということが我々の根っこ」である。「我々は残念ながら堅い壁、様々なシステムに直面している。それは国家であり、制度である。我々は勝つ見込みはない」。しかし、「我々は心を一にしてやっぱりシステムを勝手に暴走させてはいけない。システムが私たちを作ったんじゃない。私たちが作ったんだ」。そのために、「人間らしさ、そういう中に生きていかなければならない」¹⁶⁾と指摘している。また、中国の文芸理論家の銭谷融氏も「文学とは人間学である。文学の任務は人に影響を与え、教育を与えることにある」¹⁷⁾と述べている。この四人の共通点は、人間の感情と活動を重視すると共に、人と人との繋がりを明らかにして、所属された「階級」、「党派」などのラベルに惑わされることなく、認識の誤りに陥ることを避けている点にある。このことについて、胡は身近な体得があったのだろう。

胡は「文革¹⁸⁾が始まる」とすぐ、「紅衛兵¹⁹⁾によって任地の陝西省から

共青团本部」に連れ戻され、「共青团本部ビル」で「批判闘争」にかけられた。「××闘争大会、××批判大会」などに毎日連れ出されては、つるしあげられた²⁰⁾。1967年1月より胡は、全ての職務を解任され、河南省信陽市潢川県黃湖農場に送られて、「五・七幹部学校」²¹⁾で強制労働や再学習をさせられた。2年半にわたって「牛小屋（牢屋）にぶち込まれ、公衆の前で引き回され、辱め」を受けた。この時「胡耀邦夫人の李昭も、北京市の紡織系組織において造反派の批判」を受けた。子供たちも「黒い（反革命、反動）仲間」の子供のレッテルを貼られて監禁、審問され「貧農・下層中農たちによる思想改造」のために農村に送られたりした²²⁾。そして、胡は「批判闘争」中、逆に自らは「2%の誤り」しかないと確信していたので、「造反派や紅衛兵から」非常に頑固とみなされ、しばしば「ジェット機の姿勢（頭を下げ、手を広げ）で陰に陽になぐる蹴るの暴行」に遭った²³⁾。

しかし、「紅衛兵」の批判闘争に対して、胡は、「造反派が闘争に来たときに最も重要なことは二つある。第一にあらかじめ綿入れを着込み、両手を前にしっかりと抱え込む。そうすれば、両方から引っ張られても傷を受けることもないし、風邪をひくこともない。第二に必ず皮靴を履くことで、そうすれば混乱した時に速く走れるし、踏まれても足を守れる」という「秘訣」があって、逆境の中でも、「革命的ユーモア」を失わなかったようである²⁴⁾。さらに、辛かった当時について、胡は「当時私を殴った紅衛兵たちの顔は覚えているが私は彼らに復讐しようなどとは思わない」²⁵⁾、「地面に殴り倒し、足を踏みつけ、二度と立ち上がれないようにするような文革を二度と繰り返してはならない」²⁶⁾と言っている。

1971年の初春、胡は五・七幹部学校での下放労働中、病に倒れ、許可を得て「療養」のために北京に帰った。「療養」の期間中、胡は「文革中の動乱不穏の社会現象」を分析し、自ら「深く思索」し、またこの方面の「書物をたくさん」読んだ。王稼祥夫人の朱仲麗は次のように当時を語っている²⁷⁾。

耀邦同志の書斎には沢山の本箱があって、古いもの、現代のもの、色々な書物でいっぱいでした。書斎の机の上に置かれた本にはどれも赤いアンダーラインや丸印がつけられ、熱心な読書の跡を示していました。私は本棚の中に古典が沢山並べられているのを見て、あるとき耀邦同志に聞いたことがあります。「古いものも読むんですか。」耀邦同志は冗談半分に答えました。「今、仕事から締め出されていてヒマだから、このチャンスに少し古典を読んで勉強しておこうと思って……」²⁸⁾

「文学の愛好者であった」胡耀邦は人間性を重んじ、彼の考える「人間学」を現実世界においてある程度実践したといえよう。なぜかというと、「1977年12月、中央組織部長に就任後、胡は老幹部たちの冤罪やでっち上げ、誤審事件などについて、全国的に名誉回復仕事を推進した」²⁹⁾のである。そして、「22年間右派分子とされてきた50万人以上の人々」が誤りを正されたのであった。「この世界最大の冤罪事件の解決運動の過程において胡は、混乱に負けず終始一貫して初志」を貫いた。彼の「この品格と気概は優れた功績を世に遺した」³⁰⁾と楊中美氏はコメントしている。

さらに、楊によると、胡の外交思想は「民族の利益を重んじ、内政を重んじ、第二世界に重点を置く勢力均衡外交」であった。胡は原則的には毛沢東の「三つの世界」論を継承し、「独立・自主・反帝国主義・反覇権主義の外交路線」を推進した。国家間の問題処理にあたっては、周恩来の推進した「相互に主権および領土保全を尊重し、相互不可侵、相互不干涉、平等互惠、平和共存」の五項目の原則に従った。胡は中国の国力、国益に基づいて、ソ連・アメリカ両国および第三世界に対しては、「平和共存の原則」に従って、妥当で、控え目で、臨機応変の「勢力均衡外交」を推進した。「今世紀末までに中国のGDPを四倍にする」という「近代化計画」を実現し、第三世界から第二世界のメンバーとなるために、胡は経済の発展した第二世界の国々を中心に「友好外交を展開」した。第二世界の諸国と

経済、貿易、科学技術、文化、教育の各方面における「広範な協力・交流を達成」し、援助を得た。中国がGDP四倍を達成していく過程において、現実に彼らのパートナーになろうというものであった。胡は総書記就任後、まず「北朝鮮、ルーマニア、ユーゴスラビアの三国を訪問」して、「兄弟党の友好関係を深める」ことを強調したが、「彼の外遊の記録から見ると、重点は明らかに西側第二世界の経済の発展した国の訪問」にあった。1983年11月、胡は日本を訪問し、1985年4月にはオーストラリア、ニュージーランドなどの国々、そして1986年6月にはイギリス、ドイツ、フランス、イタリアを訪問した。胡の外交活動中、各界の人士と接触した記録から見れば、「彼の第二世界に対する重点外交において、日本の各界の人士に接触した頻度が最も多く」、最も力を入れていたのが日本である。日本では「中日21世紀友好委員会」を設立し、また「平和友好、平等互惠、相互信頼、長期安定」の四つの原則などを取り決めた。胡は「戦後急速に復興して経済大国になった隣国日本に対して、これを手本とし、大きな期待の念」を抱いていた³¹⁾。

1984年11月、山崎が中国の中南海に招かれた初会見にあたっては、胡は事前に「一人の中国人と日本人として会おう」³²⁾というメッセージを山崎に伝えていた。つまり、胡にとって、国家、制度などの「堅い壁」と「様々なシステム」を越えて、一個の人間としての交流が重要であったと考えられる。一国の総書記として、人間性を重視する胡の思想は当時の中国社会においてはまれではなかっただろうか。

2.2 山崎豊子の人間性

山崎は、『大地の子』の取材を1984年から1991年まで8年間をも費して遂に終えた。52年間の長きにわたって秘書であった野上孝子氏は、「どの作品に対しても、先生は大変な情熱を傾け、命を懸けて取り組んでいました。創作活動中の姿は本当に壮絶そのものでした」³³⁾と述べている。

胡耀邦と会見する時、初対面で「中国のここがいけない。あそこがいけない」と素直に怒りをぶつける外国人は、「きっと珍しかったことだろう」。しかし、「遠慮せず口にするからといって女傑という感じ」ではなく、「オシャレだし、純粹無垢なぐらい純粹なのが山崎」である。どんな相手にも「彼女のためにできることはやってやろう」という気持ちを抱かせるような、チャーミングな人であった。ある商社の人から次のようなことを言っていた。「トップの指示だから仕方なく先生のお相手をして、『忙しいのに』と思いつついろいろな話をしているうち、『先生のために教えてあげよう』という気持ちでいっぱいになっちゃう。結局、自分の仕事は後から徹夜でフォローする。そんな苦勞をいっぱいさせられましたよ」。山崎はそういう、周りを引きずり込んでいく「不思議な力」を持った人である³⁴⁾。

この「不思議な力」とは、徹底的な取材力といえよう。山崎は取材で得た事実を厳しい目をもって判別し、仕事のこととなると一切妥協せず、相手の都合も考えず、傍若無人なところもあって、「取材の鬼」³⁵⁾と呼ばれていた。さらに中国で取材する際、山崎は、「320人ほどの孤児」たちに会って、「日本人孤児の女性が実際に暮らす農家に住み込み、昼は畑に入り、持ったこともない鋤や鍬」を振るっていた。「その家には水道もなく、洗面器一杯の水で家族五人が顔を洗っていたそう」である。そして、「旧満州へは都合4回、取材に訪れた。宝山製鉄所の建設現場では作業員と一緒に泊まり込み」、内蒙古や寧夏回族自治区で、「労働改造所」という名の刑務所で「囚人にインタビューすることもできた」³⁶⁾のである。松本清張氏は山崎の全集に寄せて、「取材に徹底するのはリアリズムを重んずるからである。人の話や本の上での想像だけでは承知しない作家である」³⁷⁾と高く評価している。

1989年4月、胡は急逝した。外国人弔問客は受け入れないが、山崎は北京へ飛んで行き、遺骨の前に、「せめて小説が完成するまで待っていただきたかった」³⁸⁾と号泣したそうである。1991年6月には、山崎は『大地の子』

全3冊を恩人としての胡の霊前（江西省の共青城³⁹⁾）に捧げ、次のように心底から謝した。

八年の歳月をかけて、やっと『大地の子』は完結しました、私にとって長い峻しい道でしたが、胡耀邦総書記のお力添えを得て完成することができました。万言の謝辞を以てしても、このご恩には到底、報いることはできません、ここに『大地の子』三巻を献じ、せめてお約束だけ果たさせて戴きます⁴⁰⁾。

山崎はこのように『大地の子』を胡耀邦に献じ、「中国に還る」のである。このことは本来、「中日交流史及び中日文学と文化関係史の中で、特殊な一ページを残す」⁴¹⁾のではないか。

3 社会への影響

山崎は、取材に膨大な時間と手間をかけることでもよく知られている。その忍耐強さと丹念さは、胡の言葉を率直に受容しようとの姿勢が根源にあるのではないか。胡との会見が、作品に大いに影響を与えたであろう。その成果は、『大地の子』という作品で、戦争が過去のものではなく、現在もなおそこにある重い事実として積み上げられているのである。その後の1996年、山崎は「戦後はまだ終わっていない——『三度も捨てないで！』戦争孤児の訴えは続く」と題したエッセイで冒頭から次のように記している。

昨年（1995年）、「戦後50年の締めくくり」という言葉が氾濫した。私はその言葉を聞かされた時に、第二次世界大戦というあれほどの戦争が、50年で締めくくられてしまうのはおかしいと思った。納得がいかなかったのである⁴²⁾。

山崎は1993年から『大地の子』などの印税や利子を元に「山崎豊子文化財団」を設立し、日本に帰国した中国残留孤児の子女に奨学金助成などを行った。このように山崎は帰国孤児の日常と接する機会が増えるにつれて、彼らが自分の祖国である日本、そして日本人の思いやりのなさに非常に深く傷ついていることをよく理解していた⁴³⁾。「私の力は微々たるものだけれど、これが最後の務めなんや」ということは山崎の遺志であり、「この子供たちに、将来の日中友好の井戸堀り役になってほしいという願いも山崎にはあった」と野上は指摘している⁴⁴⁾。

また、四国の香川県高松市の高松第一高等学校では、1991年より毎年7月に中国研修旅行を行い、その参加者全員、出発前に『大地の子』を読むことを義務付けており、そして帰国後には全員に感想文を書かせていた。生徒たちは「1945年から現代に至る中国の歴史は学校でも習っていなかったもので、『大地の子』を読むまで日中間の歴史的事実をほとんど知らなかった。この本を読んで、歴史の真実を知ることができた」「陸一心のように苦勞した日本の戦争孤児が、たった一回の戦争で自分の人生が全く消され、あるいは損なわれているのを知ったとき、戦争は非常に恐ろしい、一番罪深いものだと思った」「私たちの世代は戦争を知らない、というのではすまない。これからは、昔、日本が中国でやったことを反省しながら、僕たちの世代で中国の人と友好関係を作って、戦争の悲劇は絶対、起こらないようにしたいと思った」⁴⁵⁾と述べている。

生徒たちの感想文から見ると、戦後はまだ終わっていない。そして、戦争が過去のものではなく、戦後に踏み出している現在もなおそこにある重い事実として積み上げられているのである。山崎は生き残った者として、それを語り伝えていくことを望んでいるのであろう。

さらに、宇都宮大学では、ドラマ『大地の子』を教材として、1997年度後期の共通教育複合科目を開設した。学生たちはこの講座を通して、「アジアの近現代史や戦争の歴史についていかに無知であるか、教育がされてな

いかを痛感」したようだ。そして、「第二次大戦における日本のアジア諸国に対する加害の実情の究明」と「戦争の本質は何か」などを検討した。さらに、「教科書における戦争叙述の違い」と「若者の歴史認識の相違」が比較された。「戦争について魂を揺さぶるような教育が行われていない現状」で、強い衝撃を与えたこの作品の感動を「テコにマツトウな歴史認識の扉」を開けないではないか⁴⁶⁾。

しかし、日本の政治学者の宮城大蔵氏によると、歴史認識問題とは「実に厄介なもの」である。一国の国民を国民として成立させている「最も重要な要素の一つは、歴史的経験の共有」であり、直接的な経験もあれば、「教育や言論空間を通じて継承・再生産されていく歴史的経験」もある。それが「国によって異なったものになる」のはある意味、当然である。隣接国であれば、「共通の歴史的事象をめぐって記憶や解釈は異なり」、それをめぐって摩擦が生じる。「所詮は歴史認識が一致することなど、あり得ないのだから」と放置すれば、さらに拗れ、やがて関係各国とも身動きがとれなくなる。さらに、加害者の側に位置付けられた国からすれば、「いつまでも蒸し返すな」と言いたくなるであろうし、逆に被害を受けた国からすれば、何らかの「解決」によって「過去の歴史そのものが消し去られる訳ではない」と言いたくなるであろう。それぞれの国民感情が絡むだけに、一旦問題に火がつけば、「事態の収拾は容易ではない」のである。このような負の感情の連鎖から抜け出すための一つの「手がかり」は、過去を知ることである。よく言われる「過去の歴史をよく学べ」という教えが重要なのは言を俟たないが、ここで言う「過去を知る」とは、「歴史認識についての過去」を知ることである。即ち、歴史認識問題をめぐる「不断の危機管理」体制を構築することが重要だと宮城は指摘している⁴⁷⁾。

1980年代以降、日中間で「問題となっている歴史認識問題」は、「外交問題」としての性格を色濃く有している⁴⁸⁾。特に、現在の東アジアでは、「歴史認識そのものが国際政治の歴史を大きく変えて」しまうことがある。

すなわち、「歴史が歴史認識を創るだけではなく、歴史認識が歴史を創って」しまうこともあるのだ。それゆえに、東アジアの国際政治の将来を展望して、望ましい外交政策を構想するうえで、歴史認識問題は避けて通ることができない「極めて重要な外交のイシュー」となっている。日中関係についての報道に接する際に、今や歴史認識問題が関係していないことは、ほとんどないとさえいえそうである。それほどまでに、「現在では歴史認識問題は重要な外交アジェンダ」となっているのである⁴⁹⁾。

E・H・カー氏は、「現在の眼を通してでなければ、私たちは過去を眺めることも出来ず、過去の理解に成功することも出来ない」⁵⁰⁾と論じている。言い換えれば、日中間の歴史認識問題を理解するためには、「中国政治、そして日本政治を理解する」こともまた、不可欠なのだ。なぜ「そのような歴史認識問題が浮上」したのか。なぜ「それが解決できない」のか。それは、「歴史的事実を理解する」だけでも、「歴史資料を探すだけ」でも、不十分なのであろう。相手を批判するだけではなく、「過去を理解する」と同時に「現在を理解する」ことで、複雑に絡み合った歴史認識問題に「適切に対応できる前提条件」が得られるのではないか⁵¹⁾。

4 『大地の子』における日中間の文化交渉

1984年、山崎は「中国を代表する世界的作家」の巴金氏と会う時、「先生、作家にとって何が一番大切だと思いますか」と尋ね、巴は即座に「読者です」と一言で答えた⁵²⁾。「読者」という存在も山崎にとって、足かけ8年がかりのこの作品の取材と執筆を支えていたのだろう。

同1984年、山崎は北京日本人学校の学校内を見学した⁵³⁾。最前列の机は、黒板のすぐ前でぎっしり並び、先生が机の間を歩く時に体を斜めにしなければ歩けない有様であった。また教室の扉は内側へ押すと、生徒の机にぶつかり、外に開けると、廊下を通る生徒に当たって危ないとのことで、引戸になっていた。当時の中江要介⁵⁴⁾大使は日本の外務省、大蔵省、文部

省などにも強く訴え、中国の外交部と北京市当局に何度申し入れても梨の磔になることを話された。それでも中江大使は諦めず、なお同じ訴えを続けたが孤軍奮闘の窮境に陥った。

胡との会見で、山崎は日本人学校の苦しい現状を話した。胡は「教育は、国家の人材を育てる大切なことだ、必ず解決するようにする、半年以内に」と、その場で陪席者に指示を出した。会見後、僅か3ヶ月以内に、中国側の回答がなされたということであった。1988年3月、新校舎を竣工して、生徒数207人が安んじて、勉学に励むことが出来たのである⁵⁵⁾。

文化を伝える媒介としては、通常大きく分けて「人とモノ」が想起される。ある文化を「総体的」にとらえる視角は、「言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野を総合する立場」から得られるものである。相互の文化交渉を「動的・多角的」にとらえ、意識的に豊かな「周縁」の場に立って対象を分析すること、即ち、「周縁アプローチ」と呼んだ「文化交渉学を形成するための基礎的方法論」である⁵⁶⁾。

『大地の子』は、1995年にドラマ化され、大好評を博した。NHKと中国中央電視台の合作で、政府の脚本審査もパスし、「ほとんど中国でロケを行ない、中国の有名俳優もたくさん出演」⁵⁷⁾している。その中で、主人公陸一心の養父役の朱旭氏と実父役の仲代達矢氏の別れのシーンの後で、朱が部屋に戻ると、一心の養母役の呂中氏が泣いている。「お前、何で泣いているんだ」と朱は聞くと、呂は「何で今頃、日本から父親が来て、うちの一心を取っていっちゃうの」というセリフがある。この台詞には日本人、中国人という「人種、国籍に関係なく」、母親として「言わなくてはならない」ではないか。中国文学者の竹内実氏の「歴史は歴史家が扱うわけだが、歴史の中に生きる人間の気持ちは、しばしば無視されてきた」と指摘しているように、山崎は「戦争の悲惨さ」と「戦火の中でも消えることのなかった人間愛を書きたかった」のである⁵⁸⁾。

そして、このテレビドラマは、「作品を通して流れる国境を越えた人間

愛、人類愛に審査員一同が深く感動し、涙したということ」と、「文革をはじめとする中国の知られざる部分を克明に描いた」⁵⁹⁾ という二つの理由で、モンテカルロ国際テレビ際最優秀作品賞を受賞された。確かに、日中キャストの名演技は言うまでもなく、脚本段階でも、原作者、NHK、中国政府という三方の間での折衝があった。「日中合作でなければ、あれほどのスケールにはならなかったでしょう」⁶⁰⁾ と野上はコメントしている。このような日中合作を通して、日本文化と中国文化、日本人と中国人の間で、「衝突・変容・融合をへて受容・定着する」ことはあるだろう。そして、一つの文化が「他者の目にさらされ、周縁」を掘り下げれば、「他者の目でとらえ直された文化像」は自画像として純化された文化諸相とは「異なった様相を呈する」⁶¹⁾ であろう。これは日中文化交渉の中でも非常に重要な考え方ではないかと考えられる。

おわりに

胡耀邦と山崎豊子、どちらか一方がいなければ、『大地の子』という小説は完成しえなかったであろう。そして、ドラマの冒頭で、「悲惨な戦争を生き抜いた人々の苦しみと戦火の中でも消えなかった大地の人々の恩愛を永く心に刻み、日中友好の証として捧げます」⁶²⁾ と記し、「大地の子」でとらえ直された「文化像」は日中の相互理解を深め、日中友好を結実させたと考えられる。

注

- 1) 山崎豊子・竹内実・岡崎栄「『大地の子』ふたたび 二年の歳月をかけたついに甦える日中友好の証」、文藝春秋、1995年、289頁。
- 2) 1987年から文藝春秋で連載された『大地の子』をめぐるのは、遠藤誉（当時筑波大学教授）から自著『卡子（チャーズ）—— 出口なき大地 ——』に酷似しているとして訴訟にまで発展した。裁判では遠藤の主張は認められなかった。
- 3) 第52回文藝春秋読者賞受賞式でのスピーチより、山崎は「私はこれまでいろいろ

- ろな取材を致しましたが、泣きながら取材したのは初めてです。『大地の子』だけは私は命を懸けて書いてまいりました。」とコメントしている。
- 4) 読売新聞昭和時代プロジェクト『昭和時代 一九八〇年代』、中央公論新社、2016年、15-18頁。
 - 5) 毛利和子『日中関係・戦後から新時代へ』、岩波新書、2006年、110-113頁。
 - 6) 読売新聞昭和時代プロジェクト、前掲書、98-100頁。
 - 7) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編『戦後日本の歴史認識』、東京大学出版社、2017年、94頁。
 - 8) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、101頁。
 - 9) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、103-104頁。
 - 10) 野上孝子「山崎豊子が会った三百人の『大地の子』」、文芸春秋、2015年10月、162-163頁。
 - 11) 山崎豊子「『大地の子』と私の闘い」、文藝春秋、1999年、17-22頁。
 - 12) 楊中美著・児野道子訳『胡耀邦——ある中国指導者の生と死』、蒼蒼社、1989年、252頁。
 - 13) 田尻祐一郎『江戸の思想史』、中央公論新社、2011年、138頁。
 - 14) 陶徳民「作为“人学”的东亚文化交涉学」関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)『東アジア文化交渉研究 第5号』、関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)、2012年、6頁。
 - 15) イボリト・テヌ著・平岡昇訳『英国文学史』、創元社、1943年、49頁。
 - 16) 佐藤泰正・山城むつみ『文学は〈人間学〉だ』、笠間書院、2013年、96頁。
 - 17) 陶徳民、前掲書、6頁。
 - 18) 全称はプロレタリア文化大革命であり、中華人民共和国で1966年から1976年まで続き、1977年に終結宣言がなされた毛沢東主導による革命運動である。名目は「封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という政治・社会・思想・文化の改革運動だったが、実際は大躍進政策の失敗によって国家主席の地位を劉少奇党副主席に譲った毛沢東共産党主席が自身の復権を画策し、紅衛兵と呼ばれた学生運動を扇動して政敵を攻撃させ、失脚に追い込むため、中国共産党内部での権力闘争だった。
 - 19) 文化大革命時代に台頭した全国的な学生運動。学生が主体であるが、広義には工場労働者を含めた造反派と同じ意味で使われることもある。1966年から1968年にかけて実権派打倒に猛威を振るい、文化大革命期間中に出た死亡者、行方不明者

- の一部の虐殺に加担したとも言われている。
- 20) 和気弘『胡耀邦という男——中国民主改革の星』、蒼蒼社、1987年、119頁。
 - 21) 主として文革で批判された幹部の再教育機関。文革の初まりとなった1966年5月7日付毛沢東の林彪宛指示を記念して命名。
 - 22) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、186頁。
 - 23) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、188頁。
 - 24) 和気弘、前掲書、119-120頁。
 - 25) 『北京之春』、1979年3月号。
 - 26) 胡耀邦の東京留日学生への講話、1983年11月23日。
 - 27) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、190頁。
 - 28) 朱仲麗『燦々紅葉』、湖南人民出版社、1985年、204-205頁。
 - 29) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、270頁。
 - 30) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、206頁。
 - 31) 楊中美著・兎野道子訳、前掲書、249-250頁。
 - 32) 野上孝子、前掲書、160頁。
 - 33) 野上孝子、前掲書、158頁。
 - 34) 野上孝子、前掲書、162-163頁。
 - 35) 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社、2015年、274-281頁。
 - 36) 野上孝子、前掲書、161-163頁。
 - 37) 新潮社山崎プロジェクト室編、前掲書、281頁。
 - 38) 野上孝子、前掲書、161頁。
 - 39) 胡耀邦の墓は中国首脳指定墓地である北京・八宝山公墓ではなく、江西省の共青城にある。ここは1950年代初期、中国共産主義青年団（共青团）メンバーが開墾に参加し、その後胡も3度訪問したことから、共青城市という新たな市ができた。そして李昭夫人の希望により、胡の墓がここに建てられた。
 - 40) 山崎豊子「『大地の子』中国に還る」、文藝春秋、1991年5月、152頁。
 - 41) 王向远『王向远著作集 中国題材日本文学史（第4巻）』、宁夏人民出版社、2007年、411頁。
 - 42) 山崎豊子『作家の使命 私の戦後』、新潮社、2009年、126頁。
 - 43) 阿川佐和子・山崎豊子 対談「戦争孤児の子女たちのために」、週刊文春、1993年11月、174-182頁。
 - 44) 野上孝子、前掲書、164頁。
 - 45) 山崎豊子『作家の使命 私の戦後』、前掲書、132-133頁。

- 46) 石浜昌宏・田所竹彦・景慧・伊藤一彦「ドラマ『大地の子』を検証する」、宇都宮大学学报、1998年、183-196頁。
- 47) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、265頁。
- 48) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、250頁。
- 49) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、i-ii頁。
- 50) E・H・カー著・清水幾太郎訳『歴史とは何か』、岩波書店、1962年、31頁。
- 51) 五百旗頭薫・小宮一夫・細谷雄一・宮城大蔵・東京財団政治外交検証研究会編、前掲書、240頁。
- 52) 山崎豊子「『大地の子』と私」、文藝春秋、1999年、164-166頁。
- 53) 北京日本人学校は1967年4月に開校し、日本人として最も中国の心に触れ、中国を学び得る生徒を育て、真の日中友好の礎を築くのである。山崎は中国社会科学院外国文学研究所に招待され、北京に滞在していた時、当時の中江要介駐中国日本大使の招きで、大使公邸に行ったことがあった。その時、元大使館員と従業員たちの事務所であった建物が日本人学校の校舎だという状況であった。
- 54) 中江要介（1922年12月30日-2014年3月6日）は、日本の外交官である。1984年-1987年に駐中華人民共和国大使などを務めた。
- 55) 山崎豊子「胡耀邦さんと北京日本人学校」、文藝春秋、1997年8月、226-232頁。
- 56) 藤田高夫「東アジア文化交渉学の構築にむけて」関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）『東アジア文化交渉研究 創刊号』、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）、2008年、4-7頁。
- 57) 野上孝子、前掲書、164頁。
- 58) 山崎豊子・竹内実・岡崎栄「『大地の子』ふたたび二年の歳月をかけついに甦える日中友好の証」、文藝春秋、1995年、283頁。
- 59) 山崎豊子「『大地の子』と私」、前掲書、221-222頁。
- 60) 野上孝子、前掲書、164頁。
- 61) 藤田高夫、前掲書、7頁。
- 62) 山崎豊子・竹内実・岡崎栄、前掲書、289頁。